

ひょうたん島通信

大槌発! 第40回

岩手県大槌町の大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センターのすぐ目の前に、蓬莱島という小さな島があります。井上ひさしの人形劇「ひょっこりひょうたん島」のモデルともされるこの島は、「ひょうたん島」の愛称で大槌町の人々に親しまれてきました。ひょうたん島から大槌町の復興、そして地域とともに復旧に向けて歩む沿岸センターの様子をお届けします。



灯火に集う

川上達也 大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センター
沿岸保全分野 特任研究員

大槌町に4月に引っ越し、そろそろ半年が経ちます。これまでに調査で通い慣れた場所ではあるのですが、実際に住んでみると、短い間に町の様子がどんどん変化していく様子に驚かされます。市街地では、ここ数年続いていた盛り土工事が終わり、民家やお店が建ち始め、徐々に街の灯が増えてきたようです。

沿岸センターの私の席は、大槌湾を見晴らすオーシャンビュー、で日がな一日海を眺めながら過ごしています。窓の外はすぐに海、船着き場からまっすぐ伸びた防波堤をたどればおなじみのひょうたん島、そして島には真っ赤な灯台が立っているのが見えます。2012年に再建されたこの灯台は、大槌のランドマークとして定着し、多くの人が観光に訪れている様子を目にします。

この灯台に明かりが灯る日没ごろ、水中ライトと網を持って船着き場に出かける、というのが最近の放課後の過ごし方、でなにをやっているかという灯火採集をやっています。海の動物プランクトンや魚は、虫たちが街灯などに集まると同様に、光に集まってきます。これまで

に、ハゼ類やサヨリ、チカ、フグ、メバル、ウミタナゴ、ボラ、など様々な種類の稚魚が集まってくるのが確認できました。また、季節によりだんだんと出現する種類が変わっていくのもおもしろさがあります。

生きた魚の行動を、間近に観察するのはなかなか楽しく、この夏は新しい研究テーマを考えるという名目で（半分は趣味として）、夜な夜な水面を眺めていました。じっと観察してみれば、光に対する反応も、種類によって様々であることがわかります。明るいほうにゆっくり泳いでくる魚もいれば、突進してきてすぐに通り過ぎる魚もいる。また、積極的に光に寄らずに薄暗いところで定位置している魚もいれば、むしろ暗いほうへと遠ざかる魚もいる。さらによく見ていると、餌を食べたとか、なにかを待ちかまえて

灯火採集の様子。水中にライトを投入し、集まってくる生き物を観察・採集する。



いそうだ、など、動きの意味もいろいろ推測できます。

沿岸センターにも様々なバックグラウンドの人たちが集まっており、話を聞くたびに世の中にはいろいろなことがある、という刺激があります。また研究者の出現にも季節性があるようで、例えばウミガメの人たちは夏に、これからの秋冬シーズンはサケの人たちが主に集まってくるようです。来年度からは沿岸センターも新しい建物に引っ越しします。新しいセンターにはどんな人たちが集まってくるのでしょうか。今後の展開を今から楽しみにしています。

調査船 弥生のつばやき

職場体験学習が行われました



国際沿岸海洋研究センターの調査船「弥生」と申します。皆様のご支援による竣工から早3年が経ちました。私の業務は沿岸海域の調査・観測ですが、事務室のびーちゃんの後を受け、このコーナーも担当しています。

去る9月4日(月)及び5日(火)の2日間に渡り、大槌町立大槌学園9学年の久道啓夢さんと三浦一真さんのお二人が職場体験学習で沿岸センターにいらっしました。9学年?と思った方もいらっしやと思います、それは後ほど。

職場体験学習においては、青山教授から沿岸センターの役割等の説明が行われました。また、財務会計システム、出張旅費システムの操作やドローンを利用した新しい研究実験棟工事現場の撮影、テ

レビ会議システムを利用した打合せ等、普段事務職員が行っている業務を体験していただきました。「システム操作が難しかった」という話がありましたが、難なくこなしているように感じました。

大槌学園は義務教育学校(小中一貫校)で、9学年は一般的な中学3年生にあたります。全学年に設置されている特設科目「ふるさと科」においては、学園敷地内のみならず町全体が学び舎となり、町民全員が先生になり得ると思います。

お二人とも将来像が描けているようでした。更に幅広く学び、社会で活躍することを期待していますよ。



システム操作の説明を受ける二人。

制作：大気海洋研究所広報室（内線：66430）